

歴史を生かしたまちづくり

# 横濱新聞

## 第10号

平成8年(1996年)2月10日発行  
 企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史的資産調査会  
 事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内  
 〒220 横浜西区みなとみらい3-1-1  
 TEL:045-225-2171 FAX:045-225-2172



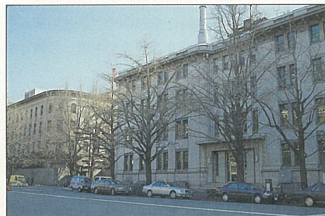
日本大通り(左:神奈川県庁) 写真撮影:米山淳一

## 日本大通り 近代都市横浜のショーウィンドウ 鈴木智恵子 (エッセイスト)

短くとも美しく燃え。恋愛映画の宣伝文句ではない。私の脳裏に閃いた「日本大通り」のコピーである。

横浜公園の出入口に立つ日本大通りの設計者プラントンの胸像前からスタートして、港に向かってまっすぐ延びる一筋の通りを歩いてみよう。前方を眺めれば、広々とした空の下、銀杏並木に彩られて、新旧の建物が調和よく並ぶゆったりとしたペーパメントが続く。一枚の絵のような美しい風景の行き止まりはかつての税関跡だ。

日本大通りの誕生は幕末まで遡る。慶応二年の大火後、これに懲りた外国人と幕府との間で結ばれた約書に基づき、日本人街と外国人居留地を分ける防火帯街路として、明治初期に整備された。歩道と車道は分離され、樹木が植えられた。道の表面は舗装されて、下水道も完備していた。西洋の技術を導入して建設された通りは、雨が降れば泥の河と化してしまうそれまでの日本の道の概念を変えてしまうほど画期的な新しき道だったのである。



横浜三井物産ビル(手前)と横浜商工奨励館

全長僅か五百m足らず。端から端まで歩いても十分ほどのささやかな通りに「日本大通り」という名は少しおおげさだが、建設当時の横浜という街の地位と雰囲気をよく伝えているように思う。往時を偲ぶ外国公館こそ姿を消したものの、今も官庁街として落ちついた佇まいを見せている通りには、横浜三井物産ビル、横浜商工奨励館、横浜開港資料館、神奈川県庁、横浜地方裁判所など、明治後期から昭和初期にかけて建てられた近代建築が並び、港都横浜の歴史の面影を色濃く漂わせ



横浜公園から日本大通りへ

ている。最近、長らく変わることがなかった通りにも変革の波が押し寄せてきた。その一つが鶯の絡まる壁が独特の陰影をもつ裁判所の建て替えであり、もう一つは優美な白亜の館、商工奨励館を中心に新聞博物館などを開設する情報文化センター計画である。

初夏には生命の躍動を感じさせる瑞々しい青葉が街も人も染め上げて、ペーパメントのような爽やかさで包み、晩秋には深まりゆく蒼穹を仰いで、



大正5年頃の日本大通り

輝くばかりの黄葉が舗道に舞い、黄金色の絨毯の上で新しい冬物語を待つ。四季折々多彩な表情を見せて、道行く人々を風景の中に取り込む日本大通りは、数ある横浜の散歩道の中で、短くとも際美しく燃え立つ存在として光彩を放っている。

近代の黎明期という、横浜の街も人も、短くとも美しく燃え上がった時代のパッションが生み出した通りは、百二十年のこの街の歴史を映し出す、近代都市横浜の華やかなショーウィンドウなのである。



# 明治の西洋館の復元が始まる 山手・イタリア山庭園内

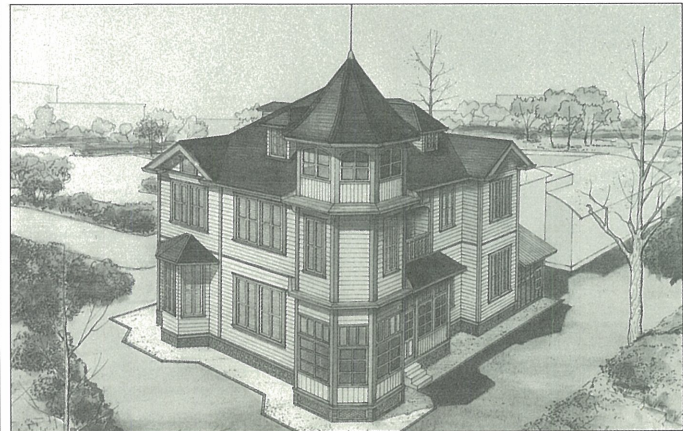
横浜市では、横浜開港以来の歴史性や外国人居留地という国際性を持つ山手地区で、西洋館を保全活用した拠点づくりを進めている。この拠点の一つ「山手・イタリア山庭園」で、今回、明治の西洋館の移築復元に向けた工事が始まった。

この西洋館「旧内田定雄（明治時代の外交官）邸」は、東京の渋谷にあったものを旧所有者の宮入久子（内田定雄の孫）さん他から横浜市が寄付を受けたもので、明治期の西洋館として、歴史的にも価値が高く国の重要文化財級の建物であるといわれている。木造2階建て八角の物見塔をもつ

立派な西洋館（建築面積192.86㎡・延床面積351.95㎡）が山手の丘の上に復元されると、明治期の山手居留地の歴史を彷彿させることとなるだろう。設計は、明治期に活躍したアメリカ人建築家J.M. ガーディナー（1857～1925）によるものだ。彼は他にも京都聖ヨハネ教会堂（国重要文化財、現明治村）等の設計を手掛けている。

山手・イタリア山庭園内には既に「プラフ18番館」が平成5年に開館している。これが大正末期から昭和初期の外国人住宅の暮らしをテーマとしているのに対し、今回復元する西洋館は、明治期の外交官邸宅における暮らしと交流など、歴史性と文化性をテーマにした「旧内田邸～外交官の家～」として活用を予定している。

今回の復元工事の設計・監理は、文化財の修復・保存で定評のある財文化財建造物保存技術協会があたっており、一般公開は、平成9年春を予定している。今から完成が楽しみだ。



旧内田邸～外交官の家～ 完成パース

# 綜通横浜ビル復活! ファサード保存、再建築 ライトアップも開始



横浜市開港記念会館の斜め向かい、本町通り沿いに綜通横浜ビルが竣工した。旧建物は鉄筋コンクリート造の表面にタイルを張った典型的な昭和初期のオフィスビル。特に、壁の縁取りや玄関まわりに使われたテラコッタ（裝飾タイル）が壁面のデコラティブな印象を強め、建物全体の表情を魅力的にしている。

今回の工事で、解体時、ファサードのタイルを一枚一枚すべて打診し、保存部位を確定し、復元タイルとあわせて活用している。このファサードを、独立の壁体として保全する手法をとっており、横浜では初めての保全方式である。

竣工にあわせ、日没から午後10時までのライトアップも開始された。本町通り側に印象的なファサードが浮かび上がり、開港記念会館とともに華やかな雰囲気を感じ出している。

●その他にも、試験的に歴史的建造物のライトアップを行ったのでここで簡単に触れておくことにする。

## ●臨港鉄道跡地（仮称：ウィンナープロムナード）

平成7年3月20日から22日まで。みなとみらい21地区と新港地区を結ぶ臨港鉄道跡地（第1号・第2号橋梁と石積護岸）のライトアップを行った。かつて貨物線が走っていた明治時代の石積護岸と、米国製の二つのトラス橋の美しい姿が夜景の中に浮かんでいた。



## ●弘明寺観音堂

平成7年7月8日から10日まで、南区の弘明寺観音堂にて実施。この演出は地元商店街と南区役所などによる共同企画。観音堂は素晴らしい姿に照らされており、恒久的なライトアップの検討を期待したい。

# 旧横浜商工奨励館 情報文化センター（仮称）として活用

旧横浜商工奨励館（中区日本大通）が情報文化センター（仮称）としてよみがえる。情報文化センターは、メディアの発展と映像文化の振興を図るとともに、関内地区の活性化を目指して建設されるもので、旧横浜商工奨励館に新たな文化機能を盛り込んでまちを再生させようというもの。

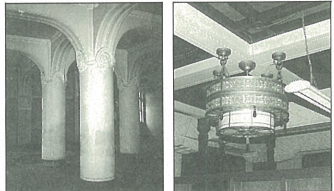
旧横浜商工奨励館は、大正12年（1923年）の関東大震災で被害を受けた横浜経済の復興を目的に、昭和4年（1929年）横浜市によって建設された。一見地味で平板な外観だが、1階は石張り、2～4階は擬石仕上げ、そしてよく突出するコーニス

など骨格はクラシックで、1階にはアール・デコ風の意匠が散見される。日本大通りと本町通りの交差点という枢要の位置を占める震災復興のシンボリックな建物の、昭和初期の意匠をよくとどめる当時の大建築である。

かつては横浜商工会議所や財団法人横浜工業館が入居し横浜経済の中心的役割を務めたが、昭和52年（1977年）以降は使われていない。

センターには日本で初めて本格的な新聞博物館が開設され、全国の新聞展示の他、新聞の歴史・機材の展示、新聞制作の体験、新聞を活用した教育等の情報・展示が行われる。

また、現在MM21地区の横浜館に暫定開設されている放送ライブラリーが、センターオープンと同時に移設される。これは、放送法に基づいて開設される全国で唯一の施設で、高い価値を持つ放送番組を、国民の財産として収集・保存し一般に公開するもの。来年度、実施設計を予定している。



建物内部：装飾丸柱 眞寶室天井、照明器具

# 舞岡公園内に古民家 復元 蘇ったアライノヤト

舞岡公園は、面積が30.6ha（現在は17.6haが公開）で、公園区域内は、豊かな緑と湧き水、そして昔ながらの田園風景が残されている。とくに、田園体験区域では、たくさんの市民が水田を耕し、収穫祭を行うなど活発に農体験に参加している。

この区域の管理運営は、市民団体である「舞岡公園を育む会」に委託されている。この会は、「まいおか水と緑の会（休耕田の復元や雑木林の植林などを市民参加型で行っていた）」の人材とノウハウを受け継ぎ、平成5年6月に発足された市民グループで、田園体験区域全域にわたった活動をしている。そして、活動の拠点となっているのが、公園の一角にある「小谷戸の里」と呼ばれる場所である。

この里に移築復元された古民家「旧金子家住宅

主屋」は、戸塚区品濃町の奥まった谷戸にあり屋号をアライノヤトと呼ばれていたが、開発事業のため現地保存ができなくなり、昭和63年（1988年）横浜市が寄付を受け解体保存していた。建築年代は土台が回っていることから明治後期と推定される。「田の字プラン」の間仕切りには、すべて建具が用いられ開放的になっている。このプランは、明治初期に座敷で蚕の飼育をしたため間仕切りの壁を取り払った結果できたものとされ、この建物が、この時代の典型的な民家であったことがわかる。

明治、大正、昭和と「谷戸」の奥に残されていた古民家が、平成の時代に蘇ったことになる。今、この建物は、谷戸の自然を愛し、農作業を中心とした谷戸の暮らしを愛し続ける人々によって新しい生命を与えられた。

谷戸の外に一歩出たとたん、密集した住宅地が見えてくる。実はこの「ふるさと」は住宅地のまんなかであった事にあらためて気づかされる。

田園体験区域 市民の手で掘られた井戸



旧金子家住宅主屋

# 天王の森・準備会発足

泉区に残る旧製糸工場の活用について検討開始

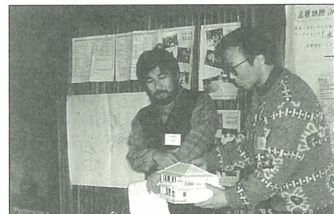
横浜市泉区和泉町に、天王の森と呼ばれる3.5ha程の斜面林がある。この中には、市内でも少なくなった里山の風景、豊富な湧き水、蛍の生息、ワサビ田、そして明治時代末の建物である旧清水製糸工場本館の一部（旧安西家住宅主屋）が残されている。

この建物は、清水製糸場の設立〔明治44年（1911年）5月〕前後に現在地の近くに建てられたが、昭和初期の生糸の暴落による工場閉鎖に伴い安西家に買収され、現在地に移築された。泉区周辺でもかつては養蚕・製糸業が盛んで、今の和泉町だけでも8カ所の製糸工場があったが、現在確認できる製糸関連施設は、市内全域でもこの建物だけである。

平成6年度、横浜市では「泉区・水をいかした街づくり」事業として、天王の森やその周辺を題材にした「水のまち」のワークショップを行った。地元の小学生を交えたこのワークショップは大成功に終わり、平成7年度には、参加者を中心とした自主的な団体である「天王森泉運営設立準備会」が発足された。現在、横浜市では、天王の森に残された緑、水、そして旧安西家住宅主屋の活用方法について、上記準備会を中心とした地域のみな

とともに検討し、平成8年度から本格整備に入る予定。

横浜の郊外で、日本の近代化を支えた生糸貿易に85年間にわたってかかわっていたこの建物も市に寄付され、新しい出番がくるまで一時解体される。しかし、地域の人々に新しい生命を与えられ、見違えるような若々しい姿で復活し、日本の近代化における横浜の役割をいつまでも伝えていくことは間違いのない。



準備会によるワークショップ



## 明治の洋館や江戸時代の古民家など5棟認定

認定歴史的建造物は合計26棟に  
登録歴史的建造物は145棟に

横浜市は、歴史を生かしたまちづくり要綱に基づく認定歴史的建造物として、新たにカトリック横浜司教館、旧安西家住宅主屋など5棟を認定した。今回認定されたのは、外国人居留地の面影を残す山手地区での明治の洋館など2棟と、江戸時代や明治時代の農家のたたずまいを伝える古民家・長屋門の3棟。これにより認定歴史的建造物は合計26棟となった。

また旧中消防地下貯水槽など4棟を新たに登録し、登録歴史的建造物は合計145棟となった。

### カトリック横浜司教館



### カトリック横浜司教館別館



### 旧安西家住宅主屋



### 旧岡家長屋門



### 旧金子家住宅主屋



●新たに登録された歴史的建造物

- ✦旧中消防地下貯水槽(明治26年築:土木遺構)
- ✦横浜商工奨励館(昭和4年築:近代建築)
- ✦神奈川新聞社本館(大正11年築:近代建築)
- ✦三吉芸芸場(昭和5年築:近代建築)

## 産業遺産の保全・活用考える

英・米からトラスト関係者来日  
歴史セミナー⑬盛大に開催

横浜の近代化を支えた産業遺産の保全活用を考えるシンポジウムを平成7年11月25日、横浜シンポジアにて開催した。約200名の参加者で、将来に

わたる産業遺産の保全活用の方策を探るものである。「産業遺産」は一般にはまだなじみが薄い。横浜では新港埠頭の石積護岸や旧横浜船渠第1号・2号ドック、クレーンなどの港湾施設や、旧臨港鉄道橋梁など明治、大正期の日本の近代化を支えた構造物があげられる。



産業遺産の保全や活用を核としたまちづくりは欧米を中心に盛んとなっており、先進事例を数多く見ることができる。シンポジウムでは英国、米国の専門家が両国での実践事例の報告をスライド等を使って行った。

英国アイアン・ブリッジ博物館館長のグレン・ローズ氏は産業遺産の管理について、米国防務省の専門家であるエリック・メロニ氏は過去25年間の産業遺産の文書記録を体験とともに紹介した。

一方日本側は、東京芸術大学教授の青木栄一氏が産業考古学の観点から、東京国立科学博物館理工学研究室長の清水慶一氏は産業遺産の取り組みにおいて国内の調査など積極的に活動していることを報告。しかし、いまだ先進国と比べると遅れていることも指摘している。

後半のパネルディスカッションでは歴史的資産調査委員会、関東学院大学教授の宮村忠氏をコーディネーターに、パネリストには調査委員会委員の堀勇良氏らを迎え、スライドを使用した事例紹介や活発な意見交換などが行われた。これを機に「産業遺産」の保全活用に関心が寄せられることとなるであろう。

## 横浜最古の近代建築よみがえる! 地蔵王廟の修理について

横浜市中区大芝台にある地蔵王廟は明治25年(1892年)、横浜で生活していた中国人の方々によ



り建てられた聖廟(れいびょう)で、中庭を取り囲むように建物を並べた中国特有の建築様式を持っていて、市内に現存する近代建築としては最古のものとして知られていた。この建造物は、木骨煉瓦造平屋建、建築面積192.1㎡、主要部材は中国広東省から運ばれ、外壁・屋根材等は横浜で調達されている。国際文化都市横浜の開港史料としても貴重であることから、横浜市教育委員会では、平成2年度に横浜市指定有形文化財として指定した。

地蔵王廟は、建築後100年を経過し老朽化が進み大規模修理が必要となったため、所有者の財中華会館が平成5年4月から修理工事を実施したが、横浜市では文化財保護の立場から補助事業として協力してきた。これまで、屋根瓦には横浜で焼かれたジェラール瓦が使われていると考えられていたが、解体修理の結果、瓦座の形などから正庁及び門庁屋根は本瓦葺、側廊屋根は棧瓦葺であったことが判明したため、事実に基づき復原した。また、建築当初の彩色を施したため、往時の華麗な姿が再現された。平成7年4月5日、財中華会館が主催して、完成のお披露目が実施された。

## 帽子をかぶった赤レンガ 赤レンガ倉庫保存工事

新港埠頭の赤レンガ倉庫は2棟あるが、南側の小さい方が1号、北側の大きい方が2号と呼ばれている。大蔵省臨時建築部(部長 妻木頼黄)の設計により、1号は大正2年(1913年)、2号は明治44年(1911年)に竣工した。

平成6年6月から、この赤レンガ倉庫の保存工事が行われている。工事の内容は、屋根の改修工事と鉄骨による構造補強工事が主なものである。

屋根の改修工事においては、1、2号合わせて約14枚におよぶ瓦の葺き替えと軒樋及び水切り等の改修、避雷針の復元工事が行われている。この工事の最中、2号倉庫西側の棟筋りの基部から工事関係者の名前が記された墨書が発見された。

構造補強工事においては、建物全体の補強として、階段室に鉄骨のフレームを組み込み、杭と地盤アンカーで支持することにより、耐震性を向上させることが主要な工事となっている。そのほか、

## 歴史的建造物所有者アンケート調査を実施 所有者の64パーセントが誇りを持つ

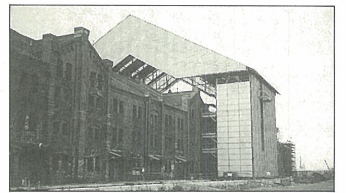
歴史を生かしたまちづくりを進めていくためには、歴史的建造物の現況や所有者の意向を知ることが必要不可欠である。横浜市では、昭和62年度、平成元年度に所有者へのアンケート調査を行っているが、時間の経過や社会状況の変化等に伴い、歴史的建造物に関する状況の変化も考えられるため、この度約500棟の歴史的建造物を対象に所有者へのアンケート調査を実施した。

ここで簡単に内容を紹介することとする。

Q.歴史的建造物の保全改修による活用を進めるため、「歴史を生かしたまちづくり要綱」を制定し、建物の登録や認定を行っていますが、それについて御存知ですか?

	知悉	古民家	近代建築	洋館	土木遺構	公共建築	計
1)知っている	20件 37%	17件 47%	22件 59%	22件 58%	57件 68%	9件 68%	147件 57%
2)知らない	29件 55%	16件 47%	12件 33%	14件 37%	8件 9%	3件 24%	81件 31%
3)無回答	4件 8%	2件 6%	3件 8%	2件 5%	20件 24%	1件 8%	32件 12%

●平成元年度アンケート回答に比べ、要綱周知件数は多くなっている。



構造的にバランスの悪い側壁揚重機室の補強や東西妻壁及び南北側壁・間仕切壁の補強、屋根のトラスの補強等が行われている。

この工事には、移動式の素屋根が活躍している。赤レンガ倉庫の平面は、倉庫室と階段室をセットに繰り返し連続したパターンになっている。今回の工事ではこの平面特性を生かし、1セット分を覆う屋根付きの足場(素屋根)を作り、これを順次移動させながら、作業を進めていく工法を採用した。現在の保存工事は平成8年3月に終了するが、引き続き、外壁レンガや開口部の改修工事に着手する予定。

Q.歴史的建造物を所有、あるいは使用管理していることに誇りをお持ちですか?

	知悉	古民家	近代建築	洋館	計
1)持っている	39件 74%	25件 70%	21件 56%	21件 55%	106件 64%
2)持っていない	1件 2%	3件 8%	4件 11%	7件 18%	15件 9%
3)わからない	8件 11%	6件 22%	4件 11%	8件 16%	24件 15%
4)無回答	7件 13%	0件 0%	8件 22%	4件 11%	19件 12%

●「1)持っている」と回答した件数が106件と圧倒的に多く、所有者の歴史的建造物に対する愛着の強さがわかる。

Q.「歴史を生かしたまちづくりセミナー」について御存知ですか?

	知悉	古民家	近代建築	洋館	計
1)知っている	8件 15%	7件 19%	5件 14%	11件 29%	31件 19%
2)知らない	42件 79%	27件 75%	27件 75%	24件 63%	121件 74%
3)無回答	3件 6%	2件 6%	4件 11%	3件 8%	12件 7%

●「1)知らない」と回答した件数が63%~79%と高い。今後も周知活動が必要である。

協力が得られ、横浜市中部公園事務所に保管されることになった。また、山手総合計画研究所の好意により綿密な実測図も残されている。いずれ蘇り再び横浜山手の歴史を物語ってくれることを期待したい。

## おまたせしました 横浜の近代建築(II)誕生!

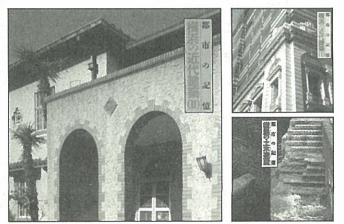
好評!! 横浜の近代建築(Ⅰ)  
横浜の土木遺産も増刷

多くの方々から待ち望まれていた写真集、都市記録シリーズ第3弾「横浜の近代建築(Ⅱ)」が発行された。

今回の冊子では、外国人居留地としてエキゾチックなまちなみが形成された山手町一帯に残る「洋館」を中心に紹介している。山手のまちも、関東大震災で壊滅的な打撃を受けたが、その復興に際し、洋館を特徴とするまちなみと生活文化が受け継がれ、横浜らしいまちなみを代表するものとして多くの人々に愛され、横浜の歴史を静かに語り続けている。

市民の方々に「まちあるき」や「地域の歴史をさぐる手がかり」など様々な活用に活用されれば幸いである。

一冊1200円で市役所市民情報センターまたは有隣堂で販売。また、好評の「横浜の近代建築(Ⅰ)」、(1500円)、「横浜の土木遺産」(1000円)も増刷された。



## 残念! 山手本通り沿いの 白い洋館取り壊される

港の見える丘公園から山手本通りを歩いて行くと、元町公園の先に煉瓦積み煙突が2本ある白い洋館があらわれる。煙突の頂部には風見があり、質感のあるドイツ壁や庭にあるシイの大木などとともに、最も山手らしい景観をつくっている。また、この洋館のすぐ裏にも同様の洋館があり、ふたつ並んでいる姿は、かつての山手居留地が偲ばれる。

しかし、この白い洋館も、時代の波に勝つことができず平成7年12月、取り壊されてしまった。

解体の報に駆けつけた都市デザイン室職員の調査により「昭和4年5月2日 上棟 室内建築事務所」と書かれた棟札が発見された。裏の洋館からも同じ棟札が発見されており、同じ設計施工者で、同じ日に上棟したことがわかった。

山手居留地時代の余韻が感じられ、横浜の歴史を物語る建物が取り壊された事は悲しみに耐えないが、暖炉や建具など特徴的な部分は、所有者の



# 歴史ある民家や洋館に楽しく住まう

## トークショーとサイラー夫妻のピアノデュオのひととき

郊外の茅葺き民家とそれらを取り巻く山林など、我々が原風景としている景色。横浜の歴史を語り、横浜を代表するエキゾチックなまちなみを形成する山手の洋館群。それらの景観を思い浮かべてみよう。どちらも横浜らしい大切な財産であると思われることだろう。

しかし、我々の生活の潤いとなる美しい自然や景観、豊かな生活文化は、開発の波により変貌しつつある。それらを保全していくには、土地利用の問題や建造物などの維持・管理の問題、さらに後継者の問題など様々な問題があり、貴重な歴史的資産を所有する者にとって、厳しく深刻な状況にあるのが現状であろう。

一方、所有者と地域住民、行政が一体となり「歴史を生かしたまちづくり」を進めているほかに、歴史的建造物に住まう人の努力や、歴史的建造物を再生し、同じあるいは違う用途で生き返らせる専門家の努力があげられる。そこで、

「歴史ある民家や洋館に楽しく住まうためには…?」

今回の特集では、歴史的建造物に愛着を持ち、それぞれ違った角度から歴史的建造物に生命を与え続けている方々にご登場願ひ、音楽、講演、トークショーなどを通じ、生活や再生、保存のそれぞれの場面での悪戦苦闘(?)の顛末や楽しみ方、建物に対する思い入れなどのメッセージを伝えていただき、我々にできることは何かを考えてみたい。以下、出演者の作品(再生事例の一部)や住まいを紹介しよう。

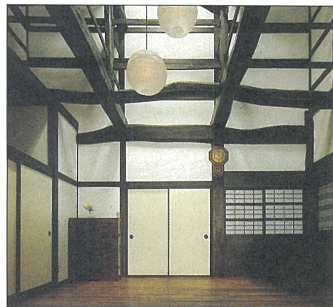
### ●降幡廣信氏による民家の再生

降幡廣信氏は、信州にアトリエをおき、信州を中心に古い民家や町並みの再生に尽くす建築家である。

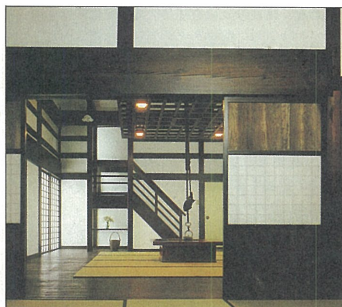
過去の生活パターンと今の生活パターンとは違うものであり、それを一つの空間で一致させると

いうことは一見矛盾に感じる。しかしこのパズルを見事に解くのが、降幡氏の実践している民家再生である。彼によって再生された民家に住まう人々は、安らかて大変満足した生活を送っている。その住宅が新築住宅と比較して決して遜色ないからだ。彼の手で、古い民家が新しく生まれ変わっていく。

写真・秋山 実



松本・草野邸 応接室の吹抜け



塩尻・大和邸 オエ(居間)を見る

### ●サイラーピアノデュオ

◆メンデルスゾーン：7つの無言歌

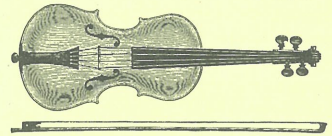
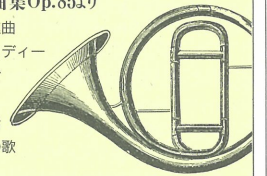
- ①5月のそよかせ
- ②出発
- ③葬送行進曲
- ④朝の歌
- ⑤ヴェニスの舟歌
- ⑥春の歌
- ⑦瞑想

◆中田喜直：日本の四季(全6曲)

- ①春が来て、桜が咲いて
- ②五月晴れと富士山
- ③長い雨の日と、やがて夏に
- ④さわやかな夏とむし暑い夏と
- ⑤初秋から秋へ
- ⑥冬が来て雪が降り始め、氷の世界に、やがて春の日差しが

◆シューマン：小さな子供と大きな子供のための12の連弾曲集Op.85より

- ①誕生会の行進曲
- ②庭で歌うメロディー
- ③噴水のそばで
- ④隠れんぼ
- ⑤お化けのお話
- ⑥夕への祈りの歌



●サイラー夫妻は、京都府日吉町の胡麻の里に移築した茅葺きの民家に住み、さらにはお寺を移築した茅葺き音楽堂「迦陵頻伽」で演奏活動を続けている。



安曇野・武井邸 南側外観

### ●菅孝能氏の洋館保全

菅孝能氏は、横浜市とともに洋館の復元を数多く手掛けている。元町公園のエリスマン邸、柏葉の風見の洋館、イタリヤ山庭園のブラフ18番館などである。横浜山手に残された洋館に対する菅

氏の取り組み方は、単に凍結的に保存し、遠くから眺めさせようとするのではない。古い洋館のもつ価値を、使うことによって再生させるという保全方法により、さらに新しい魅力が付け足される。建築家であるとともに都市プランナーである菅氏の手腕で、山手の歴史を生かしたまちがつけられ続けていく。



エリスマン邸



風見の洋館 花の咲く庭ではおしゃべりも弾む



ブラフ18番館

### ●現代生活の中に歴史が生きる

神奈川県逗子市・秋山邸

高山の合掌造りの民家を「住まうため」に移築した。移築といっても茅葺きの老朽化した民家そ

のものではなく、現代の生活に対応した床暖房、キッチン、バスなどを備え、外観もむしろモダンでさえある。

四十四畳のスペースを持つ居間は、太い柱と梁が黒く光り、高い天井が陰影を帯びて落ち着いた雰囲気を出している。木の柔らかさを肌で感じ、古い木のおい漂う生活空間である。



現代風に再生された合掌造り



佃伊裏のある和室



ゆったりとした居間には暖炉もある